

昭和五十八年の発足にあたって

佐伯史談会会長 高木嘉吉
(佐伯市藤原)

昭和も年を重ねて五十八年になった。年表を調べて治世の長い帝王を見ると、清の聖祖（康熙帝）の六十一年、高宗（乾隆帝）の六十年が目につく。天皇陛下が自愛加年されて、聖祖・高宗の記録を破ってほしいと念ずるものである。

昭和三十三年に発足した佐伯史談会は、すでに二十四年を経過した。此の間、広く各方面の支持を得て、会員五百を擁する大団体に成長したことは同慶の次第である。二十四年を回顧すれば思い出は尽きない。発足当時に委嘱した疋田 泉・山田平之丞・益田 学・平田幸市の四顧問が、それぞれ天寿を全うして長逝したことをまずあげたい。四氏とも深い研究を内に蔵して、温顔慈容、諄々として後進を指導された。

次に羽柴副会長の逝去にふれたい。羽柴副会長の追悼

は、機関誌百二十九号で尽くされているが、まだ何年か活動できる齢を残して不帰の客となったことは、痛惜おく能はざる所である。

其の他多数の会員が物故している。萬物流転・諸行無常は人の世の定めであるが、身近な人々の死に会って感慨一入ひとしおのものがある。

しかし私達は、先輩の死を乗り越えて更に前進せねばならない。温故知新の旅、道遠くとも同好の同志手を携えて進めば、たのしみ楽また尽きせぬものがあらう。年頭の所感として、五十六年・五十七年の二回にわたって、足で確めること以下六項目をあげて指針さしずとしている。こゝには繰返さないが、読み返して脚下照顧の資とされたい。

明治三十六年三月十七日生の私は八十才に達した。人生五十年は昔のこと、平均寿命は古稀を突破して喜寿に

せまっている。社会の安定と厚生施設の充実によるもので有難いことである。

私の人生は明治は少年時代、大正は青年時代、昭和年代は壮年・老年と経過した。少年時代は国家社会など念頭になく、無心に遊んで過した。青年時代は師範学校の四年を中心に、勉学の時代であった。大正十一年に初めて教壇に立った青年教師は、澎湃たる自由主義の教育思潮にとまどったものである。

昭和時代は日本にとって激動の時代である。此の激動の中で、昭和三十年まで教育に従事した。力弱い教員は風にそよぐ草であった。しかし、清らかな子供の眼を見ては、この子供の幸福のため全力を尽さねばならぬと誓ったものである。

退職と共に鶴岡の同志の人々と郷土史研究会を結成して、温故知新の旅を続けることになった。当時の同志の人は、米沢惣吉・泉 由蔵・高野喜助・若杉吉祥・羽柴弘の諸氏であったが、皆長逝されて今はなく、うたた感慨にたえない。史談会今日の発展が、これ等の人々の尊い礎石の上に立っていることを忘れてはならない。

懐古にひたって物故した先輩に思いをはせたが、顧み

て後進の人材に事欠かないことは幸甚の次第である。事務局・編集局・会計の執行部、業務分担の六部にそれぞれ人を得て、歯車がよく廻っている。また各地域にその地域をまとめ、地域の会員を指導する人を得ていることも有難いことである。

聖祖（康熙帝）・高宗（乾隆帝）の治世の長さ、昭和五十八年を比較して、天皇陛下が更に長生きされて、昭和の年数が聖祖・高祖の治世年数を凌駕することを願って筆を起したが、まとまりのないものになって汗顔の至りである。私はもちろん会員の皆さんも節制に力めて、聖祖・高宗の長寿にあやからう。

ここで希望の持てるものは平均余命である。私にも会員の皆さんにも平均余命がある。それを生き延びれば又平均余命がある。かくて尽きるところがない。此の図式通りに行くように希望を持って過したい。